

## 【研究論文】

## 大学生の進路選択時のつまずきと効果的な支援に関する一考察

長友周悟<sup>1)\*</sup>, 大塚達以<sup>2)</sup>, 猪股歳之<sup>1)</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構, 2) 東北大学大学院医学系研究科

大学在学中に進路未決定が確定し卒業・修了した43名を対象に、在学中の生活・修学状況、就職活動状況、パーソナリティの特徴という3つの側面から進路未決定リスクを明らかにするため質問紙調査を実施した。有効回答19名分のデータを分析したところ、いずれも就職活動に取り組み、学内外のサポート資源を活用しつつ進路決定に至っていなかった。特徴としては勤勉性が高く、修学と進路選択・就職活動の両立に向けた支援ニーズが高く、留年・休学を経験した者、将来への不安を抱える者が多かった。さらに学士課程と修士課程の違いに着目して分析を行ったところ、学士は単位取得困難を感じていた者、メンタルヘルス不良だった者、理想・模範的な就職活動を意識する余り高い不安を抱えていたと考えられる者が多く、修士は学習・研究面で困難を抱えていた者が多かった。進路未決定リスク回避のためにこうした点を踏まえた支援の推進が重要である。

## 1. 問題と目的・方法

## 1.1 大学生の卒業後の進路・就職状況

我が国の大学生のなかに、進路選択について困難を抱える者が存在することは以前から指摘されている。下山(1986)は「我が国においても大学生の職業未決定が増大し、それへの対処が要請されている状況」にあると述べており(下山 1986:21), 下村・木村(1994)は就職活動に取り組みながらも進路未決定の状態にある学生の様相について検討を行っている。独立行政法人労働政策研究・研修機構(2012)によると1990年代後半以降、進学も就職もしないまま大学を離れる者が増加するという大きな変化がみられている(独立行政法人労働政策研究・研修機構 2012:2)。

独立行政法人労働政策研究・研修機構(2012)は1990年から2012年までの大卒求人倍率(=大学学部生・大学院生の求人数/求職数)と大学(学部)<sup>1)</sup>卒業時点における未就職卒業生(=文部科学省「学校基本調査」において進学も就職もしていない「左記以外の者」+「一時的な仕事に就いた者」+「死亡・不詳の者」)の卒業者に占める比率(=未就職率)の関係を図示しており、大卒未就職率が求人倍率の影響を受け変動

していること、1990年に10%であった大卒未就職率が2000年まで増加し続け30%を超えるに至っていることが読み取れる。なお、未就職率はその後2008年まで減少し、増加に転じているが2012年の時点でおよそ20%に留まっている。

では最近までの状況はどうであるのか。独立行政法人労働政策研究・研修機構(2012)を参考にしつつ、求人倍率、大卒未就職率、1年以内離職率の最近20年間の推移を示したのが図1である。1年以内の離職率

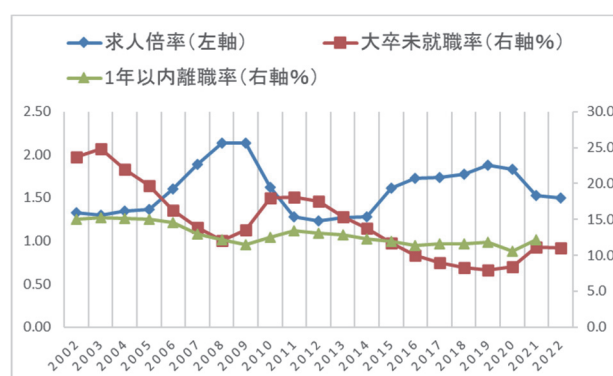


図1. 求人倍率, 大卒未就職率, 1年以内離職率の推移

求人倍率はリクルートワークス研究所『ワークス大卒求人倍率調査』を参照し、1年以内離職率は厚生労働省『新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移』を参照している。

\* ) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 shugo.nagatomo.c3@tohoku.ac.jp  
投稿資格: 1

のデータを加えたのは、大学生の進路選択に関わるもう一つの問題として早期離職が指摘されており（安達（2004）、小杉（2007）、中里（2015）など）、これとの関係をみるためである。なおここで大卒未就職率は文部科学省「学校基本調査」における学部卒業・修士修了の「左記以外の者」のみ<sup>2)</sup>について、卒業・修了者から進学者を除いた者に占める割合を示している。

これをみると、独立行政法人労働政策研究・研修機構（2012）が示したように2014年以降も求人倍率の増減に伴い大卒未就職率が変動しており、今後も求人倍率が上がることで大卒未就職者が減少していく可能性が考えられる。ただここで懸念されるのは大卒未就職率については過去20年の間に緩やかな減少傾向がみられる一方、1年以内離職率は横這い傾向にあるということである。未就職率が離職率を上回っていた時期に比べ、在学中に十分な検討ができないまま進路を決める学生が増えている可能性が考えられる。このことは大学における進路支援に関わる重要な問題である。そして現在も進学希望者を除くおよそ10人に1人が進路選択につまずき・困難を抱え進路を決められないまま大学を去っている問題があり、この問題への対応を重視する必要がある。本研究は、特に後者の問題に着目するものである。

## 1.2 進路未決定に関する先行研究

進路未決定のまま大学を卒業するリスクのある学生への支援を効果的なものにしていくためには、彼らにどのような特徴・特性があるのか、また彼らが進路選択の過程でどのようなつまずき・困難に直面しているのかを把握することが重要である。特徴・特性の把握については、進路選択におけるつまずき・困難や進路未決定に影響を及ぼす要因を明らかにしようとする先行研究から伺い知ることができる。

浦上（1994）は女子短大生を対象とした調査を行い、進路選択に対する自己効力（career decision making self-efficacy；以下、CDMSE）が高い者の方が、低い者より就職内定先の決定率が高いこと、またCDMSEが高い者の方が内定先について優位に高い満足感を持っていることを明らかにしている。また浦上（1996）は女子短大生を対象とした調査を通して、CDMSEが積極的な就職活動を導いていることを明らかにしている。このよ

うな、CDMSEと進路選択に関わる要因との関連を検討した研究には秋山（2015）のほか廣瀬（1998）、富永（2007）が示すように数多く行われている。ただ、楠奥（2011）はCDMSEを高めるための具体的な方法を見出せないのが現状であること、CDMSEに焦点をあてたキャリア・カウンセリングは至難であることを指摘している。

藤井（1999）は大学生の職業不決断を予知する要因として就職不安があると指摘している。そして女子大学生を対象とする調査を通して就職不安の構造を分析した結果、就職不安が就職活動不安、職業適性不安、職場不安の3つから構成されていることを明らかにしつつ、就職活動不安が高いと精神的健康を損なう危険性が高いことを指摘している。松原ほか（2015）は大学生を対象とする質問紙調査を通してCDMSEと就職不安および職業未決定の関係について検討を行い、就職活動中である学生がそうでない学生よりもCDMSEと就職活動不安、職業適性不安が高いこと、職業未決定に対してはCDMSEと就職不安の双方が独自に影響力を有していることを明らかにしている。ただし、CDMSEが上昇したのは就職活動の開始までの期間であるのか就職活動の開始以降であるのかは十分な検討が行えていなかった。寺上・前場（2022）は大学生を対象とした調査を行い、進路選択行動変容ステージの進行すなわち進路選択行動への動機づけや行動頻度が高まるに従ってCDMSEは向上し、同時に就職不安が低減していくことを明らかにしている。

佐藤・小林（2016）は全国に在住する高等教育機関在籍中の学生を対象とする調査を行い、卒業後の進路の決定状況と、学校生活や親の学歴、所得状況、メンタルヘルスとの関連について検討している。メンタルヘルスの状態を測る項目にはK6を用いており、分析の結果メンタルヘルスの状態が悪いことが就職決定率を低下させることを明らかにしている。同じように経済状況に着目した松川・浦坂（2022）は4年制大学卒業または博士前期課程を修了後3年以内の労働所得のある男女3,090人を対象としたWEB調査を実施し、大学入学までの実家の暮らしぶりすなわち経済状況が、その後のキャリア構想、キャリア実現の双方に大きく影響を与えていることを明らかにしている。この対象者の中に、進路未決定のまま卒業した者が含まれてい

たかは定かではないが、参考になるものといえる。

若松（2001）によると、進路未決定の学生のなかには気質的に高い不安傾向というパーソナリティ特性を持つために未決定状態も慢性的となる「indecisive型」と、進路を決めるための情報が不十分なための未決定とされる「undecided型」のタイプがあることが臨床家から指摘されてきたという（若松 2001:81）。そして若松（2001）は教員養成学部 に在籍する大学3年生を対象とする質問紙調査を行い、indecisive傾向の強い者は拡散的に新たな進路の選択肢を求めるということを明らかにしている。他にパーソナリティ特性に関するものとして松田（2014）は大学3年生に対する縦断的な質問紙調査を行い、就職活動の様相から「活動活発群」「低活動量群」「活動遅延群」の3群に分けてBig Fiveにおける差を分析したところ、外向性については活動活発群が他の2群より高く、情緒不安定性においては活動活発群が最も低く、次いで低活動量群、最も高いのが活動遅延群であったことを明らかにしている。

松田・前田（2007）は大学3、4年生を対象とした質問紙調査を行い、親や友人からのソーシャルサポート、CDMSE、職業選択への関与の間の関係を分析したところ、親や友人からのソーシャルサポートがCDMSEを促進し、職業選択への未関与を抑制することを明らかにしている。水野（2015）は大学2、3年生を対象とする質問紙調査を行い、ソーシャルサポート資源の認知・活用が進路選択不安と進路未決定に及ぼす影響について分析したところ、ソーシャルサポート資源の認知が進路選択不安の予防因として、またソーシャルサポート資源の活用が進路選択不安の対処として機能し、進路選択に対する不安の悪影響を減じることを明らかにしている。

### 1.3 本研究の目的および方法

#### 1.3.1 先行研究にみられる課題

前節で概観してきたように、進路未決定のまま大学を卒業するリスクを有する学生の特徴・特性は進路選択に対する自己効力（CDMSE）、就職不安（就職活動不安、職業適性不安、職場不安）、メンタルヘルス、パーソナリティ特性、ソーシャルサポートの認知・活用などのあり方に現れている。この他在学中の経済状

況も影響していることが考えられる。ただ学生の特徴を捉えるにはこれらの因子だけで十分とはいえず、以下の視点を新たに考慮する必要があると考えられる。

1つ目は就職活動の早期化に伴う学業上のつまずき・困難の影響である。下村・堀（1994）が1992年に行った調査によると、学生のなかで就職活動を行う時期の最も多かったのが4年生の5月、最も早かったのが3年生の1月であった。下村・堀（1994）から20年を経て松田（2014）は、一般的な就職活動が本格的にスタートするのは3年生の秋であると述べている。修士課程に置き換えれば修士1年の秋ということになる。このように大学生の一般的な就職活動はかなり早期化しているとみることができ、当然、学業との両立が問題となると考えるのが自然であろう。もし単位取得や卒業論文、修士論文など学業の面でつまずき・困難が生じた場合は就職活動に十分取り組みなくなる可能性が出てくるであろう。

2つ目は学士課程と修士課程の違いによる影響である。先行研究を概観したところ、この違いに着目したものは見当たらないが修士課程の場合は学業全体のなかでも研究に対するエフォートが高くなり<sup>3)</sup>、また学士課程より質の高い成果が求められる。研究面のつまずきが進路選択・就職活動に影響を及ぼす可能性は修士課程の方が高くなることが考えられる。

#### 1.3.2 本研究の目的

本研究の目的は、進路決定に至らないまま大学を卒業・修了した者の在学中の状況を多角的に捉え、学士課程と修士課程の違いに着目しながら進路未決定リスクがどのようなものであるかを明らかにすること、そしてリスクを回避するための具体的な支援のあり方を検討することである。なお修士課程に着目し学士課程と比較することが本研究の大きな特徴の一つである。在学中の状況を捉えるにあたっては先行研究で扱われた因子と上記の新たな視点を考慮し、大きく分けて在学中の学生生活・修学状況、就職活動状況、パーソナリティの特徴という3つの側面からみていくこととする。先行研究では学生の特徴・特性について主に心理・パーソナリティの側面から明らかにしていくものが多くみられるが、行動レベルの具体的な特徴を含めて捉えていくことが、より具体的な支援内容の検討につながるものと考えられる。なお



先行研究の多くは大学在学中の学生を対象としているが、本研究は大学を卒業・修了した者すなわち在学中の進路未決定が確定した者を対象とする。この点が、本研究の大きな特徴の二つ目である。この特徴から、進路未決定リスクの明確化が図られやすくなると思われる。

### 1.3.3 方法

対象：A大学の学部または修士課程を2021年度に卒業・修了し、2022年5月1日時点で進路が「進学」「就職」以外であった者<sup>4)</sup>のうち、本調査協力への同意を示した43名。なおA大学は10学部15研究科を持つ総合研究大学である。

時期：2023年3月

手続き：Google Formを用いた質問紙調査を実施した。2023年2月1日現在の状況について尋ねるものとし、回答時間は約30分であった。実施にあたり調査目的、データの用途、回答は任意であり回避も自由であることについて冒頭で説明し、同意を得られた者に無記名で回答を求めた。2023年3月上旬にGoogle Formを対象者に送付し、同月下旬に回答を締め切った。有効回答は19名であった。

倫理的配慮：本研究の遂行にかかる調査計画は、東北大学「高度教養教育・学生支援機構研究倫理委員会」において承認された（番号k00415）

調査項目：全26の調査項目は「学生時代の生活・修学状況」に関するもの、「学生時代の就職活動状況」に関するもの、「パーソナリティの特徴把握」に関するものから構成されている。「学生時代の生活・修学状況」および「学生時代の就職活動状況」に関する項目は筆者らにより検討し作成したものであり、「パーソナリティの特徴把握」については小塩ら（2012）による日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)を用いた。

## 2. 結果

有効回答が得られたのは19名であったが、このうち学士課程卒業者は6名、修士課程修了者は13名であった。以後、学士課程と修士課程の違いに着目しながらこれらの事例を探索的に分析し、必要な支援について検討していく。

### 2.1 学校生活・修学状況について

学習や研究を進める上で感じていた困難についてまとめたものを表1に示す。学士では「たまに感じた」「よく感じた」を合わせた割合が3分の1であり、同じ値が修士では約7割であった。

表1 学習や研究を進める上で感じていた困難

	ほとんどなかった・ あまりなかった	どちらでもない	たまに感じた・ よく感じた
学士	2 (33.4%)	2 (33.3%)	2 (33.4%)
修士	3 (23.1%)	1 (7.7%)	9 (69.3%)

在学中の学業成績の状況についてまとめたものを表2に、単位取得に困難を感じたことがあったかについてまとめたものを表3に示す。学業成績が「非常に良かった」「まあよかった」を合わせた者の割合が学士では5割であり、修士では6割強であった。先にみたように修士では学習や研究に困難を感じていた者が多かったが、講義や演習といった授業の単位取得の面では困難が少なく、成績が良かったようである。学士では学業成績がよかった者が5割であった一方、「あまり良くなかった」「良くなかった」を合わせた者が3分の1おり、また単位取得に困難を感じた者の割合は5割であった。

表2 学業成績の状況

	非常に良かった・ まあよかった	ふつう	あまり良くなかった・ 良くなかった
学士	3 (50.0%)	1 (16.7%)	2 (33.4%)
修士	8 (61.6%)	5 (38.5%)	0 (0.0%)

表3 単位取得に困難を感じたことがあったか

	ほとんどなかった・ あまりなかった	どちらでもない	まあまああった・ 非常にあった
学士	2 (33.3%)	1 (16.7%)	3 (50.0%)
修士	11 (84.6%)	1 (7.7%)	1 (7.7%)

在学中の留年と休学について、いずれもなかった者とどちらかまたはいずれも経験した者についてまとめたものを表4に示す。学士では5割が、修士では3割

がどちらかまたはいずれも経験している。

表4 在学中の留年・休学の有無

	いずれもなし	どちらかまたは いずれもあり
学士	3 (50.0%)	3 (50.0%)
修士	9 (69.2%)	4 (30.8%)

在学中の友人等との交流や交友関係についてまとめたものを表5に示す。「あまりない」「ほとんどない」を合わせた者の割合は学士で5割、修士で15.4%であった。

表5 在学中の友人等との交流や交友関係

	多い・ まあ多い	ふつう	あまりない・ ほとんどない
学士	1 (16.7%)	2 (33.3%)	3 (50.0%)
修士	5 (38.5%)	6 (46.2%)	2 (15.4%)

在学中の身体面の健康状態についてまとめたものを表6に、精神面の健康状態についてまとめたものを表7に示す。身体面の健康状態は学士、修士ともほとんどの者がふつう以上であった。一方精神面の健康状態についてみると、「あまりよくない」「よくない」を合わせた者の割合が学士5割、修士23.1%であり、学士の方が高かった。

表6 在学中の健康状態（身体面）

	よい・ まあまあ	ふつう	あまりよくない・ よくない
学士	3 (50.0%)	2 (33.3%)	1 (16.7%)
修士	7 (53.9%)	5 (38.5%)	1 (7.7%)

表7 在学中の健康状態（精神面）

	よい・ まあまあ	ふつう	あまりよくない・ よくない
学士	2 (33.3%)	1 (16.7%)	3 (50.0%)
修士	6 (46.2%)	4 (30.8%)	3 (23.1%)

## 2.2 就職活動への取り組みの状況

### 2.2.1 就職活動への取り組み

図2は、対象者の在学中の希望進路をまとめたものである。学士では民間就職と公務員就職がそれぞれ三分の一ずつを占めており、公務員希望者の比率が高いのが修士課程と比較した時の特徴の一つとなっている。また公務員希望者の存在に進学希望者も含めて考えれば、試験浪人を選択した者も多いことが推測される。一方で比率はそれほど高くないが、在学中に明確な希望を確立できなかった者も存在している。このように希望進路の傾向そのものにも差異が存在しているが、以下ではまず就職活動への取り組みについて、学内外で提供されているサポートや事業等の利用経験を学士と修士で比較しながら見ていく。

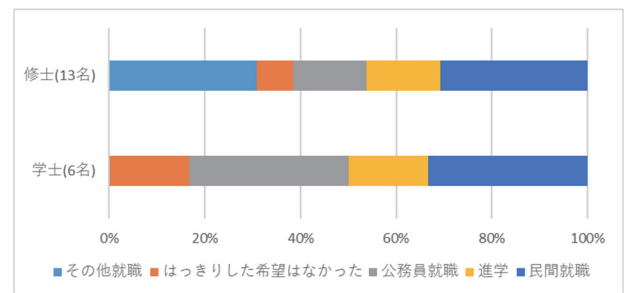


図2. 在学中の希望進路

図3は、A大学内で提供される進路決定にも活用できる各種のサポートや事業などの利用経験をまとめたものである。学士では半数がキャリア支援センターの個別相談を、三分の一程度がキャリア支援センターの説明会、学内の公務員講座、学生相談・特別支援センターの学生相談を利用したと回答している。キャリア支援センターや学生相談・特別支援センターで個別の相談を利用している者も多い。また公務員希望者の比率が比較的高かったことから公務員講座の利用者が多いことは理解できる。修士では、4割ほどの学生がキャリア支援センターの利用に加え、研究室や指導教員のサポートを受けたと回答している。学部生よりも研究室での手厚いサポートを受けることができていることがわかる。一方で、学部で2割弱、修士で3割の対象者が利用したものはないと回答している。

同様に、学外の各種のサポートや事業などを利用した経験をまとめたのが図4である。もっとも利用者比

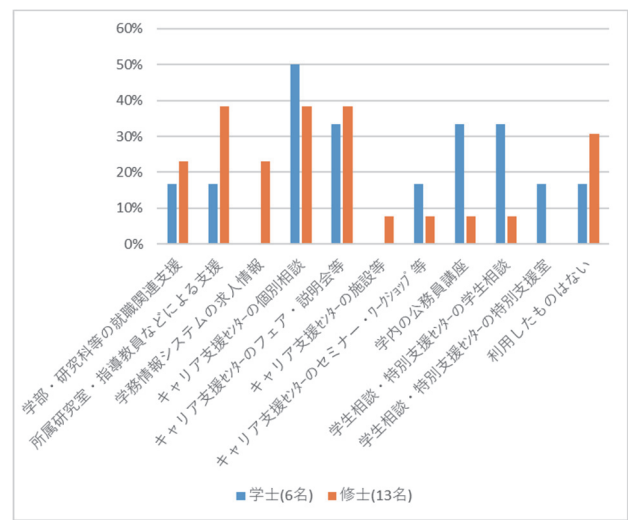


図3. 学内各種サポート・事業の利用経験

率が高いのは就職情報サイトで、学士の半数、修士の6割以上が利用したと回答している。続いて、企業団体等が実施する説明会や仕事体験などを学士・修士ともに3割ほどの学生が経験している。企業団体等が主催する合同企業説明会にも学士の3割、修士の2割ほどが参加している。また、学士の3割、修士の2割弱がこうした学外の資源を利用したことはないと回答している。

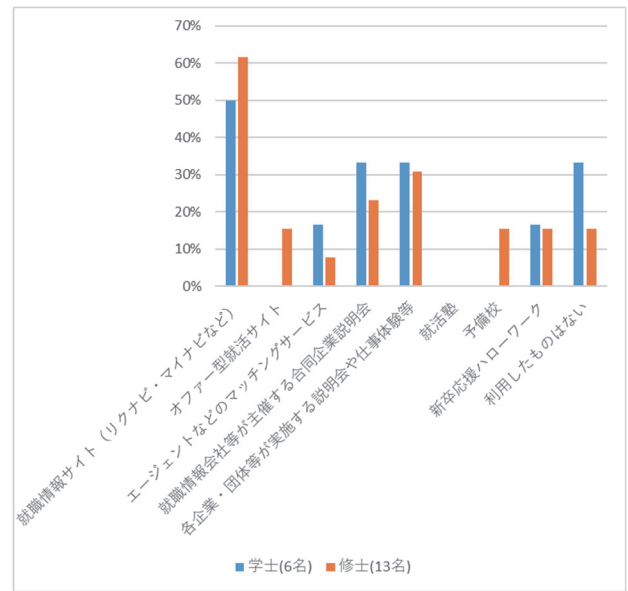


図4. 学外各種サポート・事業の利用経験

学内外のいずれにおいても、サポートや事業などを利用したことがないと回答する者が一定数あることか

ら、これら2つの変数を用いて、サポートや事業の利用の様子を確認した(表8)。学内外いずれのサポートや事業もすべて利用したことがないという対象者はいなかったが、学士修士ともに半数ほどが学内外双方の事業等を利用している。それ以外では、学士では学内のみ利用が、修士では学外のみ利用がそれぞれ3割と対照的であった。なお、事業等の利用数の平均値は学士と修士でそれほど大きく変わらず、学内事業等が学士2.2件、修士1.9件、学外事業等が学士1.5件、修士が1.7件であった。

表8 学内外サポート等利用状況

	学内のみ利用	学外のみ利用	学内外双方利用
学士(6名)	33.3%	16.7%	50.0%
修士(13名)	15.4%	30.8%	53.8%

2.2.2 就職活動に対する自己評価

在学中に就職活動や進路選択に十分な時間とエネルギーを割くことができたと考えているかどうかを尋ねた(図5)。「できた」と「まあまあできた」の合計が修士では半数近くになるのに対して、学士は3割にとどまっている。「できなかった」と「あまりできなかった」と回答したのも3割前後で、修士ではやや熱心に取り組めた層が多いのに対して、学士では取り組めた層とそうでない層、どちらでもない層が三分の一ずつという形になっている。

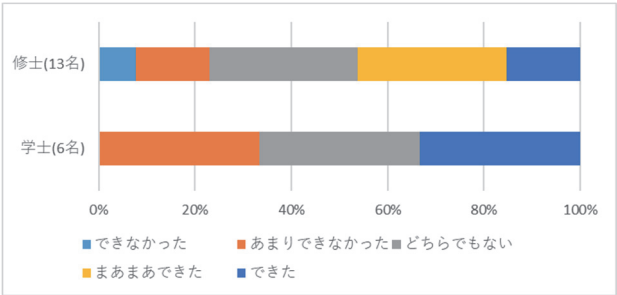


図5. 十分な時間とエネルギーを割けたか

どのような理由で熱心に取り組めなかったのか、学士2名、修士4名から回答を得た。その回答を示したのが表9である。学習や研究面だけでなく、精神面の健康状態や将来に対する不安なども阻害要因になったことがうかがえる。特に修士では、修士論文の状況が

就職活動にも影響を与える傾向が指摘できる。

表9 熱心に取り組めなかった理由

最終課程	熱心に取り組めなかった理由
学士	卒業論文の執筆
学士	授業等の単位取得 精神面の健康状態 就職や社会人になることへの不安 就職先や希望進路の明確化不足
修士	精神面の健康状態 就職や社会人になることへの不安 就職先や希望進路の明確化不足
修士	修士論文の執筆 就職先や希望進路の明確化不足
修士	修士論文の執筆 精神面の健康状態
修士	授業等の単位取得 修士論文の執筆

2.2.3 就職活動の意識と行動

在学中の就職活動や進路選択時にどのような困りごとや悩み、難しさなどを感じていたか19項目について尋ねた。「当てはまらない=1」「どちらかといえば当てはまらない=2」「どちらかといえば当てはまる=3」「当てはまる=4」として、その平均値をまとめたのが図6である。

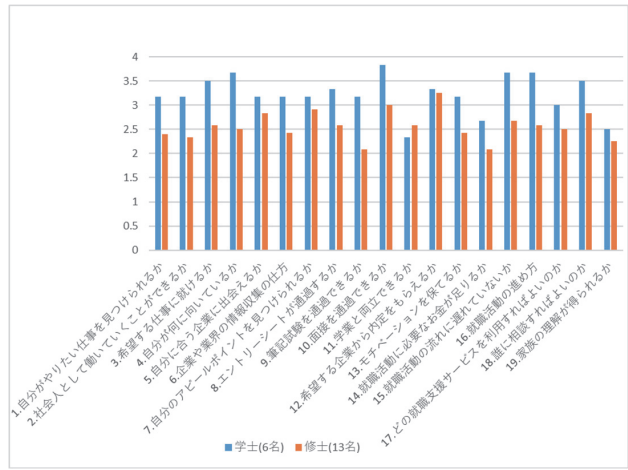


図6. 在学中の就職活動、進路選択時の困りごとや悩み、難しさ

全般的に学士で悩みなどを感じていたと回答した者が多い。特に学士で平均値が高かったのは、「面接を通過できるか」「自分が何に向いているか」「就職活動の流れに遅れていないか」「就職活動の進め方」「希望する仕事に就けるか」「誰に相談すればよいのか」などで、平均値が3.5を超える高値となっており、対象

者が強く悩んでいた項目ということができる。その他の項目でも多くは平均3、つまり「どちらかといえば当てはまる」よりも強いレベルで悩みを感じていたことがうかがえる。平均が3に満たないのは、「学業と両立できるか」「就職活動に必要なお金が足りるか」「家族の理解が得られるか」の3項目であった。

一方修士では、平均が3を超えるのは「希望する企業から内定をもらえるか」と「面接を通過できるか」の2項目のみで、それに「自分のアピールポイントを見つけれられるか」「誰に相談すればよいのか」「自分に合う企業に出会えるか」などが続く。その他多くの項目は平均2から2.5付近の値となっているが、「筆記試験を通過できるか」や「就職活動に必要なお金が足りるか」で低い。

こうした結果を踏まえ、これらの19項目を分類するために因子分析を行った（主因子法、エカマックス回転）。その結果、固有値1以上の5因子が抽出された（表10）。第1因子は「家族の理解」「就職支援サービス」「筆記試験」「情報収集」「学業との両立」「流れへの遅れ」などについての項目の負荷量が高く、「就職活動プロセスへの適応に対する不安」と考えることができる。第2因子は「やりたい仕事」「相談相手」「何に向いているか」といった項目の負荷量が高く「理想・模範的就職活動のスタートへの不安」と考えられる。第3因子は「社会人として働く」「モチベーション維持」「就活の進め方」などの負荷量が高く「就職活動を完遂することへの不安」と考えられる。第4因子は「希望する仕事への就職」「自分に合う企業との出会い」「希望する企業からの内定」「就職活動費用（マイナス）」などの負荷量が高く「理想・模範的就職活動の実現に対する不安」と考えられる。そして第5因子は「アピールポイント」「エントリーシート」「面接」などの負荷量が高く「自己アピールに対する不安」と考えることができる。

この分析結果から因子得点を算出し、学士と修士の平均値を比較してみると、すべての因子で修士よりも学士で不安が強かったことが分かる（図7）。なかでも第3因子の「就職活動を完遂することへの不安」や第2因子の「理想・模範的就職活動のスタートへの不安」では学士の不安が大きく、課程間での差が大きく



なっている。

表10 在学中の就職活動、進路選択時の困りごとや悩み、難しさに関する項目の因子分析の結果

	1	2	3	4	5
19.家族の理解が得られるか	0.768	0.089	0.327	-0.250	0.058
17.どの就職支援サービスを利用すればよいのか	0.765	0.216	0.261	0.001	0.353
9.筆記試験を通過できるか	0.714	0.151	0.453	0.103	0.047
6.企業や業界の情報収集の仕方	0.700	0.355	0.277	0.214	0.236
11.学業と両立できるか	0.623	0.285	-0.262	0.345	0.138
15.就職活動の流れに遅れていないか	0.551	0.352	0.216	-0.047	0.490
1.自分がやりたい仕事を見つけられるか	0.019	0.957	0.046	0.115	0.147
18.誰に相談すればよいのか	0.457	0.773	0.134	-0.068	-0.050
4.自分が何に向いているか	0.129	0.765	0.017	0.527	0.111
2.社会人として働いていくことができるか	0.186	0.022	0.838	0.106	0.174
13.モチベーションを保てるか	0.130	0.068	0.769	0.142	0.165
16.就職活動の進め方	0.352	0.320	0.653	0.216	0.328
3.希望する仕事に就けるか	0.137	-0.012	0.451	0.789	0.167
5.自分に合う企業に出会えるか	0.252	0.412	0.216	0.770	-0.039
14.就職活動に必要なお金が足りるか	0.293	0.097	0.427	-0.696	0.314
12.希望する企業から内定をもらえるか	-0.348	0.203	0.342	0.622	0.428
7.自分のアピールポイントを見つけられるか	0.050	-0.124	0.049	-0.066	0.925
8.エントリーシートが通過するか	0.512	0.408	0.199	0.227	0.539
10.面接を通過できるか	-0.088	0.429	0.491	0.277	0.534
因子寄与	7.969	2.867	2.164	1.348	1.052
寄与率	41.942	15.087	11.39	7.093	5.535

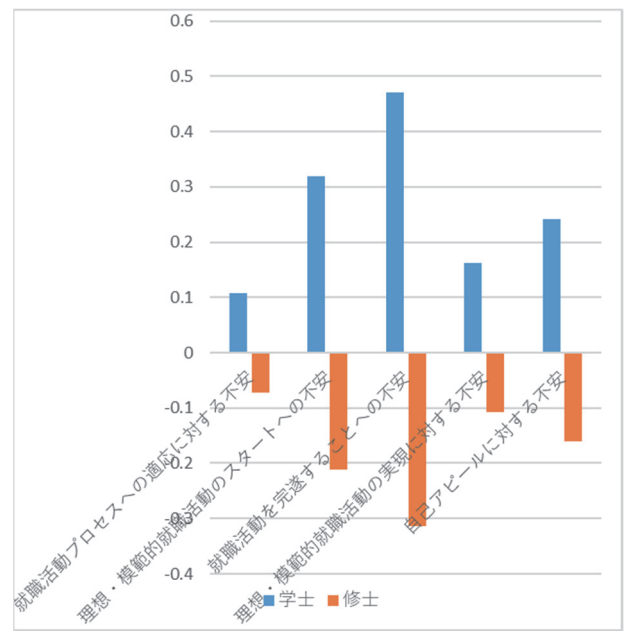


図7. 5つの因子における因子得点の平均

## 2.3 パーソナリティの特徴について

### 2.3.1 TIPI-J下位尺度得点の傾向

表11にTIPI-Jの各下位尺度の得点の平均値と標準偏差を示す。なお、TIPI-Jの各質問項目への回答に一部欠損があった対象者が2名（修士）いたため、修士については、外向性は13名、協調性は11名、勤勉性・神経症傾向・開放性は12名のデータを解析に用いた。

TIPI-Jの下位尺度得点の平均と標準偏差は、外向性

は $7.26 \pm 2.49$ 、協調性は $9.18 \pm 2.19$ 、勤勉性は $8.11 \pm 1.91$ 、神経症傾向 $8.17 \pm 2.36$ 、開放性 $8.61 \pm 2.12$ であった。

表11 TIPI-J下位尺度得点の平均値と標準偏差

	人数	平均	標準偏差
外向性	19	7.26	2.49
協調性	17	9.18	2.19
勤勉性	18	8.11	1.91
神経症傾向	18	8.17	2.36
開放性	18	8.61	2.12

### 2.3.2 学士と修士の比較

図8に学士・修士別のTIPI-J下位尺度得点の平均値を示す。

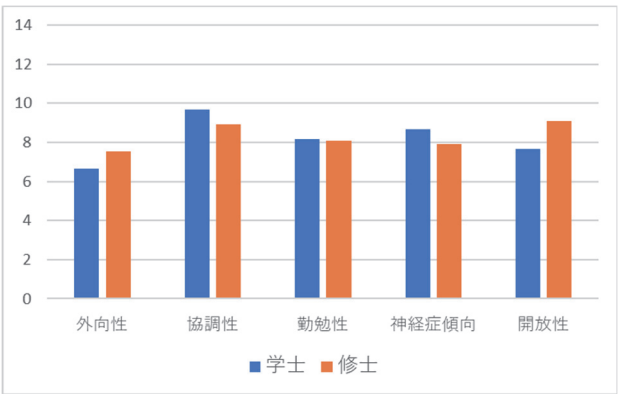


図8. TIPI-J下位尺度得点（学士と修士との比較）

下位尺度得点の平均（学士vs 修士）は、外向性（6.67 vs 7.54）、協調性（9.67 vs 8.91）、勤勉性（8.17 vs 8.08）、神経症傾向（8.67 vs 7.92）、開放性（7.67 vs 9.08）であった。学士では修士に比べて、外向性と開放性が低く、協調性と神経症傾向が高い傾向がみられた。また、勤勉性についてはほぼ同等であった。

### 2.3.3 メンタルヘルスとの関連

図9に、TIPI-J下位尺度得点と精神的健康面についての主観的な評価についての結果を示す。精神的な健康状態について、「よい」「まあまあよい」を良い、「ふつう」をふつう、「あまりよくない」「よくない」を悪い、の3群に分類した。



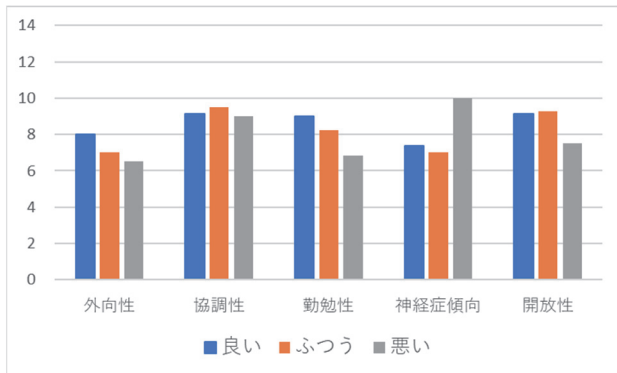


図9. メンタルヘルスとTIPI-J下位尺度得点

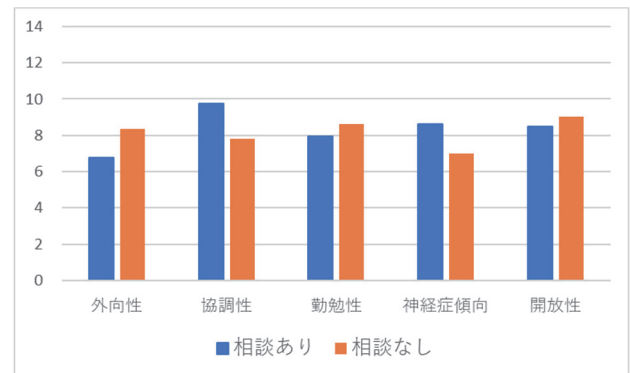


図10. 相談行動とTIPI-J下位尺度得点

下位尺度得点の平均（良い vs ふつう vs 悪い）は、外向性（8.00 vs 7.00 vs 6.50）、協調性（9.14 vs 9.50 vs 9.00）、勤勉性（9.00 vs 8.25 vs 6.83）、神経症傾向（7.38 vs 7.00 vs 10.00）、開放性（9.13 vs 9.25 vs 7.50）であった。神経症傾向については、メンタルヘルス不調がある群で得点が高く、メンタルヘルスが「よい」と「ふつう」では同等であり、開放性についても、メンタルヘルスが「悪い」群で得点が低く、「よい」と「ふつう」では同等であった。また、外向性と勤勉性については、メンタルヘルスの状態が悪くなるほど平均点が低い傾向が見られた。一方で、協調性については、メンタルヘルスの状態との関連は認めなかった。

#### 2.3.4 相談行動との関連

図10に、TIPI-J下位尺度得点と就職活動や進路選択についての家族・友人への相談の有無についての結果を示す。相談の有無については、「非常にしていた」「まあまあしていた」を相談あり、「あまりしていなかった」「ほとんどしていなかった」「どちらでもない」を相談なしと分類した。相談ありは13名、相談なしは6名であった。

下位尺度得点の平均（相談あり vs 相談なし）は、外向性（6.77 vs 8.33）、協調性（9.75 vs 7.80）、勤勉性（7.92 vs 8.60）、神経症傾向（8.62 vs 7.00）、開放性（8.46 vs 9.00）であった。「相談なし」の学生では、外向性の得点が高く、協調性及び神経症傾向が低い傾向が認められた。一方で、勤勉性および開放性の得点の平均については、両群で同等であった。

### 3. 考察

#### 3.1 進路選択におけるつまずきについての考察

生活・修学状況の側面からみるとまず、学士は単位取得、修士は研究とそれぞれ修学上の困難を抱えており、特に修士に多かった。1.3.1で述べたように、修士では学士より質の高い研究成果が求められ、学業全体に占めるエフォートが高くなる分、つまずきや困難が生じれば進路選択や就職活動への影響も大きくなりやすいと考えられる。このようなことから特に修士で学習や研究に困難を感じる学生の中に、進路未決定リスクを抱える者が多くいることが考えられる。

また学士の多くが友人等との交流や交友関係を持てていなかった。ここで一つ考えられるのは新型コロナウイルスの影響である。今回の調査対象となった学士の場合、卒業した最終学年とその前年はキャンパス入構制限を受けたり授業がほとんどオンライン化されたりする中で学生生活を送っている。そのため必然的に交友関係が縮小し、そのことが回答に反映していた可能性がある。一方修士は研究室運営の補助やティーチングアシスタントなど、何らかの役割遂行を通して交友関係を構築・維持しやすかった可能性がある。この点については今後、新型コロナウイルスの影響を受けていない学生のデータを踏まえて検討する必要があるが、今回の結果に基づけば交友関係が乏しい者については進路未決定のリスクがあると考えられる。

また精神面の健康状態が不良な者が学士・修士に一定以上おり、学士の方が多かった。これまでみてきたように、学士においては修士より学業成績不良の者、単位取得に困難を感じる者、交友関係が乏しい者が多

かった。このようなことは、精神的健康状態とも密接に関わっていることが推測できる。本研究では佐藤・小林（2016）と同じ尺度を用いてはいないが、精神的健康状態が不良であることは進路未決定のリスクになっていると考えられる。

これらを踏まえ着目すべきは留年・休学経験者が学士・修士とも多かったことである。文部科学省の学校基本調査のデータを用いると、修学年限を超過しつつ大学に在籍している学生の割合を算出することができる。令和4年度のデータに基づくと学士でこの割合は3.3%である。大学院では修士のみの算出が困難だったため、参考として修士と博士を合わせた割合をみると10.2%であった。一口に修学年限超過といっても、これに関わる理由は様々であろう。文部科学省（2021）によれば大学院生を含む学生の休学の理由には「学力不振」「学生生活不適応・修学意欲低下」「就職・起業等」「転学等」「海外留学」「病気・けが・死亡」「心身耗弱・疾患」「経済的困窮」などがある。留年についていえば、これに直結する理由は進級や卒業・修了に必要な単位の不足や卒業論文または修士論文の未提出であろうが、背景には様々な問題があることが考えられる。

本研究の調査対象である進路未決定者について考えると、彼らの留年・休学の理由は必ずしも進路・就職に関するものとは限らず、修学上のつまずき・困難や学生生活不適応、病気・けが、心身耗弱・疾患などもあり得る。こうしたことから、留年・休学の経験がある学生には進路未決定のリスクがより高くなることは十分に考えられる。

次に就職活動の取り組み状況の側面においては、学士修士ともに「希望する企業から内定がもらえるか」や「面接を通過できるか」といった不安が強かったことが確認できた。就職活動の結果の成否にかかわることで、不安や心配を感じる者が多いのは想像に難くないが、特に学士で平均値が高かった項目からは、就職活動の理想・模範型や適職・天職が存在し、それを達成することが望ましいという暗黙の前提やプレッシャーが強く存在していることがうかがえる。例えば、「就職活動の流れに遅れていないか」や「就職活動の進め方」などにみられるような就職活動の理想・模範型の存在とそれへの適応、「自分が何に向いているか」

や「希望する仕事に就けるか」などにみられるような自分の適職を見つけ、それを獲得することが就職活動の成功といった固定的なイメージである。

特に学士では、理想・模範的な形で就職活動を始めて社会人になっていくというイメージを実現できるのかどうかという点に不安が大きく表れている。「自己アピールに対する不安」も合わせて考えるならば、自信の弱さがこうした回答につながっているとみることもできる。

本調査では就職活動におけるいわゆる活動量は把握していないが、今回の回答者はいずれも就職活動経験を持っていた。しかし多くの回答者は学習・研究との両立、就職活動そのものや自身の将来などに対する不安を感じながらの活動であったことが明らかとなった。特に心理面においては、本来学生をサポートするためのガイドとなることが期待される就職活動モデルが、あまりにも強い理想・模範のモデルとして機能してしまうことで学生の不安を助長してしまっている可能性もうかがわれる。こうした不安を低減することが就職活動の活発さや継続性、ひいては進路決定につながっていくものと考えられる。

パーソナリティの特徴については、TIPI-Jの下位尺度の得点にはカットオフは存在しないため、一般の大学生を対象としてTIPI-Jを用いて行った先行研究の結果との比較を行った（図11）。

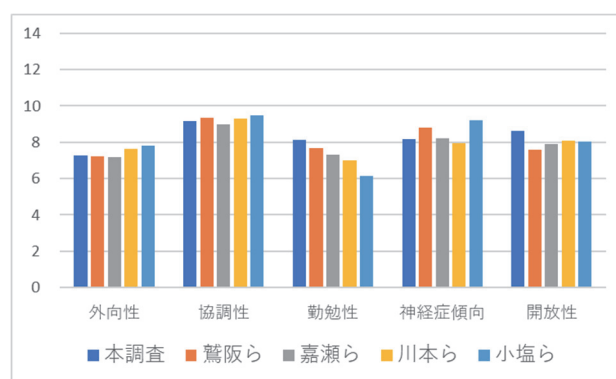


図11 先行研究のTIPI-J下位尺度の平均値との比較

鷺阪ら（鷺阪 2019: 19-27）の調査対象（20代から60代）のうち20代の76名、嘉瀬ら（嘉瀬 2017: 195-203）の調査対象は大学生（大学、専門学校、短期大学、大学院に在籍する学生）400名（平均年齢19.5歳）、川本ら（川本 2015: 107-122）の調査対象（23-79歳）の

うち20歳代の91名、小塩ら（小塩 2012: 40-52）の調査対象は大学生902名（平均年齢19.2歳）であり、およそ本研究の対象者と同じ年齢層と考えられた。

4つの先行研究の結果と比較して、本研究の対象者では、勤勉性と開放性の得点が高い傾向がみられ、外向性、協調性、神経症傾向については、おおむね同等の平均値であった。勤勉性の高さは、規律を守り目的をもって物事を遂行することができるため、学校などのある程度枠組みの決まった環境においては有利に働くと考えられる。しかし、勤勉性の生真面目さや完璧主義さは、不確実性の高い就職活動においては不適応に作用し、進路未決定につながっている可能性がある。広瀬は、強迫傾向の生真面目さに着目して進路未決定との関連を調査し（広瀬 2009: 75-88）、強迫傾向の高い学生は、職業選択にあたり、不安が強く決定を回避する傾向があり、就職活動への支援において今までのパターンが通用しなくなることから来る不安や困惑を十分に認識・理解した上で支援する必要があると示唆した。また、本多が大学生を対象に行った進路決定に関連する信念や悩みについての調査では、「進路決定は一度きりで変更してはいけない」「進路によって自分の社会的評価が決められてしまう」といった信念が進路決定の悩みと関連していると報告されており（本多 2008: 87-100）、勤勉性の生真面目さが柔軟な思考の妨げになり、就職活動における進路の選択肢を狭めている可能性がある。これまでの報告から、進路未決定に関連する要因として、気質的に高い不安傾向というパーソナリティ特性が指摘されているが（若松 2001: 209-218）、本研究の対象者の神経症傾向は一般の大学生や20代に比べて高くはなかった。進路未決定に関する先行研究では学生を対象とした調査が多く、就職活動中の進路未決定には神経症傾向の高さが関連していることが指摘されている。そのことから本研究でも卒業・修了時の進路未決定には神経症傾向の高さが関連していることが予測されたが、本調査ではその関連性は認められなかった。本研究では開放性の平均値は先行研究と比べて高かったが、開放性の高さは、後述の学士と修士の比較にあるように、修士の知的好奇心や創造性の高さを反映している可能性が高いと考えられた。就労支援の観点からは、勤勉性の高い生真面目な

学生が進路未決定となるリスクが高い可能性があり、進路決定において広い視野で柔軟な思考を持てるような支援方法や内容の工夫が必要であると考えられる。

学士と修士の学生における比較では、TIPI-Jの下位尺度得点の平均が異なる傾向が見られた。パーソナリティ傾向に対する年齢の効果については、協調性、勤勉性、神経症傾向において、年齢に伴う直線の変化が報告されている（川本 2015: 107-122）。しかし、学士と修士の年齢差では、年齢の影響は小さいと考えられ、修士と学士におけるTIPI-Jの各下位尺度得点の平均値に差が認められた理由に、修士課程に進学する学生のパーソナリティ特性として、外向性や開放性が高い傾向がある可能性がある。

メンタルヘルスの不調と関連するパーソナリティ特性として、神経症傾向は高い傾向、外向性や勤勉性、開放性は低い傾向がみられた。パーソナリティ特性とメンタルヘルスについて、嘉瀬ら（嘉瀬 2017: 195-203）は、TIPI-Jを用いてパーソナリティ・プロトタイプに基づいた類型化と精神的健康の関連について検討を行った。その結果、神経症傾向が低く他の特性が高い「レジリエント型」に比べて、神経症傾向が高く他の下位尺度の点数が低い「統制過剰型」では精神的健康が不良であったと報告している。本研究結果からも、神経症傾向が高い学生では、メンタルヘルスの不調を自覚していることが多く、就労支援において心理的な支援を並行して行うことが重要であると考えられた。

相談行動につながりにくいパーソナリティとして、協調性と神経症傾向が低い傾向、外向性が高い傾向が認められた。相談なしの学生では神経症傾向の平均値が低かったが、神経症傾向が低い学生は、不安や悩みが生じて自己解決することができたり、そもそも不安や悩みを抱きにくいために相談をする必要性を感じなかった可能性がある。一方で、神経症傾向が高い学生は、不安を抱きやすいために、不安の解消のために家族や友人への相談行動につながっていると考えられた。しかし、神経症傾向が高い人は、情緒の不安定さや抑うつ気分などを呈しやすいとされ、メンタルヘルス不調の高リスク群であるため、相談行動自体は行っているが、家族や友人への相談が本人のニーズを満たしているか注意を要する。協調性が低い学生は人的



ネットワークが狭く、相談する相手の存在が少ない可能性が考えられた。井上(井上 2016: 17-41)が行った、大卒未就業者を対象とした調査では、就職活動で落ち込んだ時に「特に相談しなかった」と回答した割合が、内定者(66名)では20.2%であったのに対して、未内定者(89名)では36.4%と高く、未内定者は内定者に比べて、人的ネットワーク範囲が狭いことや悩みを相談する相手が少ないことを指摘している。そのため、協調性の低い学生に対して、就職活動を始める前の段階から人的ネットワークの構築を意識した支援を行っていくことが重要であると考えられる。一方で、外向性の高い傾向の学生は人的ネットワークも構築しやすく、相談する相手が多いと考えられたが(山際 1991: 113-119)、実際には外向性が低い学生の方が相談行動を行っているという結果であった。外向性は自尊感情との関連があるとされ(Watson 2002: 185-197)、自尊感情が高い人では、援助要請による自尊感情の低下を恐れるため援助要請を行わないとの仮説(認知的一貫性仮説)(Bramel 1968: 355-365)があり、本研究では自尊感情についての調査を行っていないために憶測の域を出ないが、外向性の高い学生に対しては自尊感情に注意したアプローチが必要かもしれない。また家族や友人への相談に加え、相談窓口の利用状況に関する検討を行っていくことも必要である。

## 3.2 進路未決定リスク回避のために必要な支援

### 3.2.1 進路未決定者の特徴を踏まえた支援

今回の調査対象者は就職活動に取り組み、学内外のサポート資源を活用しつつも進路決定には至らなかった者である。勤勉性が高く生真面目さゆえ、進路検討の課程において柔軟な思考を持つことが難しくなる可能性があり、修学と進路選択・就職活動の両立に向けた支援ニーズが高く、留年・休学を経験した者、将来への不安を抱える者が多かった。これらを踏まえた支援として、以下のことが考えられる。

既に多くの高等教育機関で実施されている例があるが、低単位の状況にある学生や休学の申出をする学生と面談を行う取り組みは、本調査の結果からも非常に重要であることが指摘できる。低単位の背景には修学上のつまずき・困難があり、さらに意欲、健康、家族・

友人関係、課外活動など様々な問題や悩みが関連してくる可能性がある。またケースによっては留年に直結し進路未決定のリスクを高める可能性も出てくるであろう。このため低単位の学生をなるべく早い段階で把握するとともに、面談を継続的に実施することにより学生が抱える問題・悩みを丁寧に把握すること、そして適切な窓口・部署との連携を図ること、これらと合わせて個々の学生の性格・特性に応じた進路選択に関する支援を行うことが有効であると考えられる。休学を申し出た学生については、復学後にも面談を通して状況把握を行うことは一層効果的と思われる。たとえば体調悪化からの回復など、休学中に問題が十分解決しないままやむを得ず復学するケースもあり得るからである。休職者の復帰時には復帰プログラムが用意されていることが多いが、高等教育機関での休学からの復帰時にも積極的なサポートが期待される。

特に修士の場合、研究や学業のつまずきが表面化した頃には採用選考スケジュールが進んでしまっており、研究と就職活動を両立・あるいは挽回することが困難な状況に陥ってしまう可能性がある。そうした点を踏まえれば、研究活動への適応に関するより早期からの支援が重要になるということが指摘できるであろう。

### 3.2.2 学士課程と修士課程の違いに応じた支援

学士については、単位取得困難な状況にある者に対する修学支援を丁寧に行うことを通して進路選択・就職活動への移行あるいは修学と並行しての取り組みをスムーズにしていくことが考えられる。また実際の進路選択・就職活動の段階では理想・模範的な就職活動のモデルにとらわれ過ぎないように、個々人のイメージや進め方を自己肯定できるような支援や情報提供を行うことも重要であろう。留年・休学を経験している場合、通常の修学年限を超過していることに過度の不安を感じる者がいることも考えられるが、そのような不安の軽減を図る支援も重要と思われる。メンタルヘルスの不調を訴える者がいた場合、背景には様々な問題を抱えている可能性があり、医療機関をはじめ適切な援助資源を利用できるよう支援することが重要と思われる。

修士については研究活動や修士論文の執筆に関わる支援・指導が先ず以て重要と思われる。修士課程では

同じ大学であっても学士のときと異なる研究室から進学する者、また他大学の学部から進学する者もあり、環境の変化が大きい場合には時に困難が生じやすいであろう。その場合、研究室を中心とした新しい環境に順応し研究活動に速やかに適応できるよう支援することがまず重要であり、修士論文の執筆の過程においても大きなつまずきが生じていないか、また外向的に見えても相談ができていないということがないか、といった点にも留意しながら研究指導を進めていくことはリスク回避のために有効であると思われる。

### 3.3 本研究の限界および今後の課題

本研究は在学中の進路未決定が確定した卒業生・修了生を対象に、学士課程と修士課程の違いに着目して進路未決定リスクを明らかにすべく質問紙調査を実施した点が特徴的であったといえる。しかしサンプルの数が少なく、今回は探索的な分析にとどまった。さらに文系と理系を区別して分析することもできなかったが、特に修士については進路決定に及ぼす影響の違いが大きいと考えられる。また日本人学生と留学生の違いについても扱っていなかったが、日本国内での就職を目指す留学生には言語の壁や雇用慣行への適応など特有の困難があると考えられる。総合研究大学においてさらに実効性が期待できる支援のあり方を追求するためには、今後はより多くのサンプルをベースに、文系と理系の違い、日本人学生と留学生の違いにも着目した分析を行っていくことが必要である。

#### 注

- 1) 公開されている「学校基本調査」の調査結果をみると2012年までの修士・博士修了者のうち「一時的な仕事に就いた者」の具体的な人数が示されていない。このことから学部卒のみのものと推定される。
- 2) 『学校基本調査』における「不詳・死亡の者」についてだが、たとえば学部生についてみると平成9年は29,840人、平成10年は32,051人と3万人前後だったものが平成20年には10,803人、平成29年には5,088人と値が小さくなり、令和4年は1,261人となっている。これまで、このカテゴリーに未就職卒業者が含まれていた可能性はあるが、調査の精度が一定であったとは考えにくい。

- 3) 東北大学学生生活支援審議会(2023)によると、1週間あたり研究および卒業論文・修士論文等の執筆にあてる時間が20時間以上の者は学士で12.4%であるのに対し、修士では52.2%である。
- 4) 2022年5月1日時点で進路が「進学」「就職」以外である者の特定は、「学校基本調査」における「卒業後の状況調査」のために文部科学省に提出している卒業・修了者の進路情報に基づいている。

#### 引用文献

- 安達智子(2004)「大学生のキャリア選択－その心理的背景と支援」『日本労働研究雑誌』No533, pp. 27-37.
- 秋山史子(2015)「大学生の進路選択に対する自己効力感、就業動機、および職業未決定の関係」『学習院大学人文科学論集』第24巻, pp. 203-222.
- Bramel, D. (1968) "Dissonance, expectation, and the self" R. P. Abelson et al. (Eds.) Theories of cognitive consistency: A sourcebook. Chicago: Rand-McNally. pp. 355-365.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構(2012)「大卒就職の変化と未就職卒業者支援」『労働政策研究報告書No141. 学卒未就職者に対する支援の課題』第4章, pp. 75-100.
- 藤井義久(1999)「女子学生における就職不安に関する研究」『心理学研究』第70巻第5号, pp. 417-420.
- 廣瀬英子(1998)「進路に関する自己効力研究の発展と課題」『教育心理学研究』第46巻第3号, pp. 343-355.
- 広瀬香織(2009)「大学生における強迫傾向(生真面目さ)と進路未決定の関連について-学生支援の視点から-」『四天王寺大学紀要』第27号, pp. 75-88.
- 本多陽子(2008)「大学生が進路を決定しようとするときの悩みと進路決定に関する信念との関係」『青年心理学研究』第20号, pp. 87-100.
- 井上奈美子(2016)「大卒未就業者が抱える困難とその行動特性」『熊本学園大学論集『総合科学』』第21巻第1号, pp. 17-41.
- 嘉瀬貴祥ほか(2017)「パーソナリティ・プロトタイプに基づいた大学生の類型化と精神的健康の関連」『日本健康教育学会誌』第25巻第3号, pp. 195-203.
- 川本哲也ほか(2015)「ビッグ・ファイブ・パーソナリティ

- 特性の年齢差と性差:大規模横断調査による検討』『発達心理学研究』第26巻第2号, pp. 107-122.
- 厚生労働省『新規学卒就職者の在職期間別離職率の推移』より「[表] 新規学校卒業就職者の在職期間別離職状況」, (閲覧2023/8/15)  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html>
- 楠奥繁則 (2011)「進路選択セルフ・エフィカシーからみた大学教員によるキャリア・カウンセリングの研究－“ケース&ワークブック”開発のための予備的研究－」『大学教育研究ジャーナル』第8号, pp. 1-16.
- 松原弘和ほか (2015)「大学生の職業未決定に自己効力と職業不安が与える影響」『徳島大学地域科学研究』第5巻, pp. 1-9.
- 松田由希子・前田健一 (2007)「大学生の職業選択未関与におよぼす自己効力感と親や友人からのサポートの影響」『広島大学心理学研究』第7号, pp. 147-158.
- 松田侑子 (2014)「4ヵ月間の就職活動による類型化と関連要因の縦断的検討－就職活動不安, Big Five, ストレスコーピングの観点から－」『キャリア教育研究』第33巻, pp. 11-20.
- 松川晴美・浦坂純子 (2022)「キャリア構想・キャリア実現における格差は挽回できるか:大学生の視野を広げるもの」『評論・社会科学』第143号, pp. 45-65.
- 水野雅之 (2015)「サポート資源の認知および活用が進路選択不安と進路未決定に及ぼす影響」『カウンセリング研究』第48巻, pp. 121-132.
- 文部科学省 (2021)「大学等における令和3年度後期の授業の実施方針等に関する調査及び学生への支援状況・学生の修学状況等に関する調査の結果について (周知)」
- 文部科学省 (2022)「令和4年度学校基本調査 (確定値) について公表します」, (閲覧2023/8/15)  
[https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt\\_chousa01-000024177\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221221-mxt_chousa01-000024177_001.pdf)
- 中里弘穂 (2015)「若年者の早期離職の要因と職場並びに教育現場での効果的な離職防止策を考える」『経済教育』第34巻, pp. 51-56.
- 小塩真司他 (2012)「日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」『パーソナリティ研究』第21巻第1号, pp. 40-52.
- 小杉礼子 (2007)「大卒者の早期離職の背景」小杉礼子編『大学生の就職とキャリアー「普通」の就活・個別の支援－』第5章, pp. 155-214.
- 佐藤純恵・小林美樹 (2016)「新規学卒者の学校から就業への移行に関する分析:学生時代のパフォーマンスが就職に与える影響」『国民経済雑誌』第214巻第6号, pp. 45-56.
- 下村英雄・木村周 (1994)「大学生の就職活動における就職関連情報と職業未決定」『進路指導研究』第15巻, pp. 11-19.
- 下村英雄・堀祥道 (1994)「大学生の職業選択における情報収集行動の検討」『筑波大学心理学研究』第16巻, pp. 209-220.
- 下山晴彦 (1986)「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』第34巻, pp. 20-30.
- 寺上愛香・前場康介 (2022)「大学生の進路選択における自己効力感と不安の関連」『跡見学園女子大学心理学部紀要』第4号, pp. 147-153.
- 富永美佐子 (2007)「進路選択自己効力に関する研究の動向と課題」『キャリア教育研究』第25巻第2号, pp. 97-111.
- 東北大学学生生活支援審議会 (2023)『令和4年度【東北大学学生生活調査】のまとめ 東北大学生の生活』
- 浦上昌則 (1994)「女子学生の学校から職場への移行期に関する研究 - 「進路選択に対する自己効力」の影響 - 」『青年心理学研究』第6巻, pp. 40-49.
- 浦上昌則 (1996)「女子短大生の職業選択過程についての研究－進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から－」『教育心理学研究』第44巻, pp. 195-203.
- 若松養亮 (2001)「大学生の進路未決定者が抱える困難について－教員養成学部の学生を対象に－」『教育心理学研究』第49巻, pp. 209-218.
- 鷲阪龍太・山田一成 (2019)「公募型Web調査におけるTIPI-Jの利用可能性の検討」『社会心理学研究』第35巻第1号, pp. 19-27.
- Watson, D., et al. (2002) “Global Self-Esteem in Relation to Structural Models of Personality and Affectivity”, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 83, pp. 185-197.
- 山際勇一郎 (1991)「援助行動に影響を及ぼす性格特性の総合的検討」『筑波大学心理学研究』第13巻, pp. 113-119.